

柿は百鳥の友

柿は昔から家庭果樹の定番で、甘いものに飢えていた私の子供時代には早生の品種が 熟すのを待ち焦がれていたものです。中生、晩生と進んで最後は干し柿用の渋柿を収穫し、家族総出の夜なべで皮むきをした懐かしい記憶があります。

柿は今でもスーパーで売られていますが、商品として流通しているのは大粒で無傷のものばかりです。これを見慣れた人には手入れもされず小粒で虫食い交じりでは敬遠されるのでしょうか、樹上に残ったままのものを見かけます。

この様な木には野鳥が食べに来ますから撮影には好都合です。しかし、他人の家の庭先では勝手にカメラを向けられませんし、邪魔なものが映り込んでしまいます。



(写真左)。

カラスの仲間ではハシブトガラスにハシボソガラス、オナガ。

スズメ、シジュウカラも食べます。

叶内拓哉著「野鳥と木の実ハンドブック」のカキノキの一節を引用すると「完全に動物質しか食べない鳥を別として、私はカキノキの実を食べない鳥を知らない」と言い切っています。

私もキツツキの仲間のコゲラが食べたのを見てびっくりした事があります。

かなり特殊な状況下ですが、白鳥が食べている写真を見た事もあります。実をつけた枝が水面近くまで垂れ下がっていて、首を精一杯伸ばして食べている場面でした。

小鳥類は果肉をつついて食べますから種子散布の役に立たないでしょう。本来はサルなどの哺乳類が種子散布の担い手で、種の周りのヌルヌルはかみ砕かれず歯の間をすり抜ける仕掛けだそうです。鳥類はご馳走を美味しく頂くだけの身勝手な立場です。

そこで、秋が深まる前に写真の撮れそうな木を探しておき、鳥が来る季節になったら足しげく通うことになります。

カメラのレンズを通して観察していると色々な野鳥がやってくるのが見られます。ヒヨドリとメジロが多く、次いでツグミ(写真左)アカハラ、シロハラなどの大型ツグミの仲間。

大群でやってきて騒がしいのはムクドリ



昔話つれづれ

『さるかに合戦』

「サルがいるので注意」こんな市内放送が流れて、こんなところまで北進してきたかとびっくりしたのはこの夏のことです。サルと言え、黍団子たった一つで家来になってしまう気のいい人役で出演した『桃太郎』のお話もあるけれど、主役をはるのは『さるかに合戦』。仲間（バージョンによっては母カニ）の敵討ちと銘打って、かなり残酷な（と思える）仕返しをサル相手に実行するのは、一方の主役のカニたち。床屋のカニと違って海辺が舞台ではないので、生涯を通じて内陸に住むサワガニのことかなと思っています。

サワガニは、このあたりではシミスガニと呼ばれていて、きれいな水の湧くところにはいくらでもいたときいています。畑でも見られることがしばしばだったとか。田んぼでは畔に穴を掘るので、コメ作り農家には大敵。

湿地回復のためにみよ（斜面林下からの湧き水を集めた水路のこと）掘りをしていた時のこと、チビガニがそれこそわらわらとわいてきたことがありました。昔はハマグリを食べると入っていたカニの大きさ。孵化して母さんガニのお腹から出たばかりだったかも。驚かせてごめんなさいと思いつつ、かわゆさにほっこりしました。写真は抱卵したメスのサワガニ。



『竹取物語』

キンラン、ギンラン、シュンランに一面のチゴユリ、フデリンドウで縁取りされた小道……そんな雑木林だったのに、開発で切り取られたあとに周辺が造成されて日当たりが抜群によくなったせいか、数年前からマダケがはびこりだしました。困ったなと思っていた矢先、あっとい間に雑木林を埋め尽くす勢いで繁茂。倍々で増えるとうより、本数の本数乗で増えていく感じです。

冬にへその高さで切って、「お前はもう死んでいる」と通告するのですが、まだまだ増える方が多いのです。それに切った竹の始末もたいへん。側枝をしっかりと打ち落としておかないと（この作業はけっこうストレス解消に役立ちます）、枯れても強い枝ぶりのまま残ってやっかいです。切っても切っても、かぐや姫もその養育費の小判も出てきませんが、6月のタケノコは最高に美味。あく抜きしなくていいし、お味噌汁に入れても甘辛く煮着けてもおいしいものです。ただし食べられる部分はほんのちょっぴりしかないのが玉に瑕。（写真はマダケのタケノコ）



『鉢かづき姫』

日本のおとぎ話で一番好きだったのがこの話です。どうしてか弱い姫様が金銀財宝の入った重いものを頭にかぶって暮らしていったのか、そこが不思議で不思議で……。今読むと観音様

のおかげで無重力状態という作りになっていたのだらうと推測できます。

この鉢をひっくりかえしたような形をした炭焼き機を使って、切った竹や雑木林の落ち枝などを燃やしています。雑木林の手入れの始末ついでに、焼いてできた炭を田んぼで使おうという試みです。

秋日和というより、まだ暑かった9月の終わり、その炭焼き機でマシュマロ焼きをしました。ホタルの田んぼの稲刈りに参加した家族のもぐもぐタイムです。

草からはもくもく煙が出てきますが、けむいのなんかなんのその、食べたいのではなく、竹の側枝につけたマシュマロを焼くのがおもしろいのです。焚火が身近でできなくなり、垣根の曲がり角の先はアスファルトの道があるだけ、炎といえばガスコンロ、そのガスさえ電気に替わっている昨今、火を見る楽しみが遠のいていました。

姫も小僧もなにより大人が喜んだ焼き焼きタイムでした。

(写真はマシュマロ焼き)



印西市 小山尚子

トホシテントウ

テントウムシは子ども達の人気者です。日本には 100 種類以上もいるそうです。よく観られるナナホシテントウやナミテントウの種類はアブラムシを食べる肉食、キイロテントウやムーアシロホシテントウの種類は菌食です。また、ナス科を食べるニジュウヤホシテントウ、ウリ科を食べるトホシテントウなどは草食で、大きく分けて、肉食、菌食、草食の3種類に分けられます。見分け方は、体に光沢があるのは肉食や菌食、細かい毛が生えていて光沢がないのは草食です。

秋の谷津田でひときわ目を引くカラスウリで見つかるのは、トホシテントウです。トホシテントウの体をよく観ると光沢がないので草食だとわかります。背中にハートのマークがあり、愛くるしい。晩秋にはカラスウリの枯枝や枯葉の中でイガイガの幼虫がたくさん見つかります。一匹葉っぱから捕って触ってみました。棘の先は枝分かれしてまた棘がでています。おそろおそろ触ってみたら、全然痛くない。お顔を拝見したら、なんとレモンイエローの身体につぶらな瞳を持つニコニコマークのお顔でした。

テントウムシは触ると黄色い汁を出します。正体は血液。血液の中のコルネリンと言う成分が臭くて苦みを出し、鳥などの天敵から身を守っているそうです。体から血液を出して身を守っているとは。小さな虫たちの生きるための作戦、すごいな。



山下美佐子 (東金市)

カラスウリとトホシテントウ

環境問題について思うことー日々の生活の中でできることは

レジ袋の有料化が、本格的に始まって1年が過ぎ、今ではマイバックを持参していないと、うしろめたさを感じるくらいになりました。

一方、最近マイクロプラスチックの話題が取り上げられることが多くなり、その度に生物たちへの影響に心が痛みます。

私たちを取り巻くプラスチック製品は膨大なもので、レジ袋が占める割合はごくわずか。今やプラスチックなしの生活はできない状態になっています。その中で、最近ショックを受けたことはプラスチック製品の劣化のことです。洗剤が要らないくらいよく落ちると勧められ、重宝していたアクリルたわし、実は使っているうちに劣化して水に溶け、やがてマイクロプラスチックになるといいます。植木鉢やポリバケツ、洗濯ばさみなども日が当たり、劣化して、やがてマイクロプラスチックになると。40年以上庭仕事で愛用していたベビーバスも、決して褒められたことではなかったのだと反省しきり。路上に捨てられたビニール袋、お菓子の袋、飴の包み紙などなど、危ない！

そういえば発泡スチロール製のトロ箱はすっかり姿を消しました。

よくプラスチックごみを中国や東南アジアの国々に引きとってもらえなくなって置き場に困っていると言われますが、それは全くのエゴ。置き場で劣化されたプラスチックがやがてマイクロプラスチックに変わるのはどこの国でも同じです。スリランカでゴミの山に象が群がってビニール袋を除きながらごみをあさっている映像をご覧になった方もいらっしゃるでしょう。

マイクロプラスチックが空気中にも浮遊していることが最近観測され、コロナが収束してもマスクが外せない時代がやってくるのではと心配されています。

観察会などでもこんな話に触れたらいいと思います。自然観察指導員としてこのような啓蒙活動も必要ではないかと考えます。

✪家庭で簡単にできる環境を守る行動

- ペットボトル入りの飲料水をやめ、麦茶などは沸かしたり、水出ししてマイボトルに、スポーツ飲料やジュース類は粉末を利用
 - 普段の食糧品の買い出しは、食べきれぬ量・使い切れる量におさえる。外食などの際には、食べきれぬかどうかを考えて注文する
 - 不要になった肌着類を食器洗いの際の油汚れふき取り布として使う
 - 資源ごみを分別して出す。(段ボール、新聞、本、古着、牛乳パック、ペットボトル、食品容器など)
 - リサイクル品と表示されているものを進んで購入する。(ティッシュ、トイレットペーパー、文具など)
- (他に環境を守るために皆さんはどんなことをなさっていますか)

今年度のノーベル物理学賞に日本人の真鍋淑郎さんが選ばれ、温暖化が異常気象に関係していることが立証されたと称賛されました。

世界各地で大規模な洪水や山火事などの異常気象が起っています。身近なことでは北海道の海で赤潮が発生し、秋サケやウニなどが大量に死ぬ被害が出て、これも温暖化が原因だと言われています。「食べたいものが食べられなくなる」時代にならないように折からイギリスでCOP26（国連の気候変動対策の会議）が開かれます。

これを前にイギリスのエリザベス女王は、「世界の指導者たちは話をするばかりで行動しない」などと不満を漏らされたことが話題になっています（残念ながら静養のため欠席されることになりましたが） 本当にそう思います。もうほっておけない状況です。日本の企業も先を争うかのように温室効果ガス対策を発表しています。

政治家にも企業にも真剣に取り組んでほしいものです。

船橋市 塚原晃子

食べたり食べられたり

前回、食草に成虫が来て卵を産みに来る話をしました。しかしそれがすべて育って成虫になっていくということではありません。卵が寄生されたり中身を吸われたりや孵化しない卵もあります。幼虫になっても鳥やハチの餌になってしまうたり蛹が寄生されてハチやハエが出てきたりします。アシナガバチは、虫を探す私たちのように、穴あき葉っぱのところで幼虫の餌探しをします。虫を見つけたらその場所を何度も通ってきます。アオスジアゲハ幼虫は食事をするところとお休みするところを分けています。そうすることで天敵防止のための知恵かもしれません。一方で、鳥と同じぐらい目のいいアシナガバチは見つけづらいヤブガラシのなかでもスズメガ幼虫を見つけ出してしまいます。（大きい幼虫だったので何回も肉団子を作っては運んでいました）セミやスズメバチをつかまえてしまう程の最強のオオカマキリですが、卵のうは鳥やカマキリタマゴカツオブシムシにたべられたりしてしまいます。春になっても幼虫が出てこない卵のうをみるとカツオブシムシの幼虫の抜け殻が見られると思います。

千葉市 松本美千代



アゲハの卵とゴミを背負うタイプのクサカゲロウ

孵化したアオスジアゲハ幼虫
デーニツハエトリにつかまる

ヒメスズメバチを捕まえたオオカマキリ
ハラビロカマキリ卵のうとカマキリタマゴ
カツオブシムシ

北の国だより

10月に入り、北海道は、一気に冬に向かっていきます。すでに、札幌近郊の山々も雪をかぶり、市内では、冬の訪れを告げる雪虫が飛び交うようになりました。自然観察指導員講習会に参加するために、久しぶりに千葉に帰りましたが、やはり、気候の差をひしひしと感じますね。
(佐野由輝)

森林・林業・環境機械展示実演会

10月9～10日、全国育樹祭の併催行事として、森林・林業・環境機械展示会が、苫小牧市で開催されました。会場には、最新の高性能林業機械が勢ぞろいし、圧巻でした。林業分野の進歩も目覚ましいものがありますね。

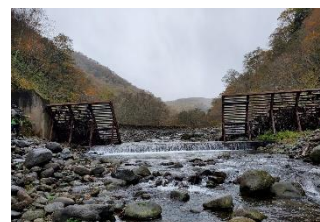
9月号と10月号でも紹介しましたが、北海道に来てはじめての趣味であるリーフアート作品も、職場のブースで披露させていただきました。なかなかの評判だったようです。



世界自然遺産でR型自然保護

10月23～24日に千葉県で開催された自然観察指導員講習会では、「自然の保護」の講義を担当させていただき、自然保護にはP型、C型、R型の3種類があると説明しました。原生的な自然＝P型自然保護、農山漁村＝C型の自然保護、都市＝R型の自然保護のイメージが強いかと思いますが、今回は、日本でも最も原生的な自然が残っている箇所である、世界自然遺産知床におけるR型の自然保護の事例を紹介します。

世界自然遺産に指定されているとはいえ、知床半島の沿岸部は、古くから漁業の町として栄え、町を守るためのダムも多く設置されていました。自然遺産指定後、調査の結果、そのうち、13基については、改良が可能ということで、ダムの切り下げや撤去などを行い、サケの遡上環境を確保する取り組みが進められています。サケが上るようになれば、ヒグマも大喜びですよ。



スギとブナが似合う奥尻島

千葉県に住む皆さんのイメージでは、ブナは寒い雪国の木というイメージがあると思います。ところが、北海道の感覚ではブナは南の木、北海道でブナが自生しているのは渡島半島以南であり、私が住んでいる札幌には、自生していません。ところが、不思議なことに、千葉でもおなじみのコナラやクリは札幌に自生しています。



そして、道南の離島である奥尻島には、ブナの天然林が広がっており、紅葉の季節は森全体が黄金色に輝いています。今まで各地でブナ林を見てきましたが、奥尻島のブナ天然林が一番美しいと感じました。



さらに面白いことに、奥尻島の人工林の主要樹種はスギです。札幌以北では、人工林といえば、カラマツ、トドマツ、エゾマツですからね。スギ人工林とブナ天然林が同居する奥尻島。一口に北海道といっても多様ですね。